様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５３０５６５

研究課題名（和文）近世農民社会における家システム

研究課題名（英文）The Peasant Family System in Early Modern Japan

研究代表者
岡田　あおい（OKADA, AOI）

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：５０２４６００５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,300,000円、（間接経費）　990,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、世帯構造を分析するためのデータベースを構築し、近世農民社会の世帯構造（家システム）を解明することであった。データベース構築に用いた史料は、東北日本２地域（会津山間部４か村・二本松平野部３か村）と中央日本１地域（美濃平野部６か村）の宗門改帳である。当初予定したデータベースの完成には至らず、一部データ入力とデータクリーニングを残す結果となったが、完成度の高い東北日本のデータを用いて、人口及び世帯構造の基本的指標について分析をおこなった。婚姻、単独世帯の特徴、家督継承のタイミングについては論文として発表した。

研究成果の概要（英文）：This research has two objectives: first, it aims to create a database of household structures using Shumon Aratame Cho(SAC); second, it aims to analyse the structure of households through the use of this database. For this study, historical materials were used in creating the database consisting of SAC from 2 regions in north-eastern Japan (Aizu and Nihonmatsu) and 1 region in central Japan (Mino).
During the creation of the database, we encountered some problems that needed our attention. Due to these problems, we were unable to complete the initially planned database, which in turn left some of the data entry and data cleaning tasks unfinished. However, for the task of analysing fundamental population and household structure indices, we were able to use complete databases from some villages. Using the results of our analyses, we published papers pertaining to marriage, solitaries and succession.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：家族社会学　歴史人口学　世帯構造　宗門改帳　データベース　農民　家　直系家族

１．研究開始当初の背景

直系家族は日本に典型的な家族形態とみなされてきたが、社会史の研究成果として、工業化以前のヨーロッパでも直系家族が発見され、直系家族は農民社会の家族形態として位置付けられようとしている。

斎藤修は、「比較史上における日本の直系家族世帯」（速水融編著『近代移行期の家族と歴史』）のなかで日本の直系家族と北欧・中欧の直系家族を比較し、日本の直系家族はその基底にあるシステムが北欧・中欧の直系家族とは異なると主張する。日本の場合は、北欧・中欧でも観察される世帯主が両親と同居するタイプと、北欧・中欧では観察されない世帯主が結婚した子どもと同居するタイプの直系家族が観察される。この点を根拠として、斎藤は日本の直系家族には、合同家族型(type of joint family)とも、核家族型とも区別される、異なる基底的家族システムが存在する、と主張する。まさにこのシステムが家システムであると申請者は考える。ヨーロッパの直系家族と我が国の直系家族の異質性について実証研究を蓄積し検討する必要がある。日本の独自システムを解明することは学術的な意味がある。

また、1990 年以降の宗門改帳を史料とした世帯構造の研究は、戦前から蓄積されている家研究を念頭に置きながらも、研究の焦点は「家の永続性」のみに絞られてきた。既存の家研究では、「家の永続性」は家の特質の一つにすぎない。家研究の掘り起こしを含め、研究を整理し、世帯構造研究とのリンクを模索する必要があると考えている。

２．研究の目的

本研究は、近世（徳川後期）農民社会の世帯構造メカニズムを明らかにするために、宗門改帳を史料とした大規模な世帯構造分析用のデータベースを完成させることを第一の目的としている。このデータベースを用い、世帯形成のメカニズムを明らかにすることが第二の目的である。各地域の人口学的条件がどのように直系家族世帯形成に影響を及ぼし、また歪みを発生させるのかが解明できれば、我が国の家システムの特徴が見いだせると考えている。

国際比較という観点にたてば、フランスピレネー地方やバスク地方の直系家族世帯との本格的な比較研究へと発展する可能性が生まれる。

具体的には、東北日本２地域（会津山間部４か村・二本松平野部３か村）と中央日本１地域（美濃平野部６か村）の宗門改帳を史料とする世帯構造分析用データベースを構築する。これまでの経過から、史料のデータベース化にはかなりの時間を費やすことが明らかなので、データベース作成作業と並行し、データベースの完成した村、あるいは地域から、人口指標および世帯に関する基本的な指標を提示することにしたい。

本研究の特徴は、第１に、徳川後期の家族世帯の実証研究をおこなう点にある。近世後期以降の家族形態は、伝統家族の社会学的研究や近世史研究の成果により、直系家族を形成していたと自明視されている。しかし、徳川後期まで遡ると、農民家族の実証研究は非常に乏しく、しかも、１か村の史料を用いた研究に限られている。徳川後期の家族世帯研究が僅少な理由は、史料の問題と分析方法の問題にある。史料の問題は、歴史人口学の史料として利用されている、宗門改帳を家族世帯の研究に利用することによって払拭される。第２の特徴は、分析の単位を拡大する点にある。既存の研究では、村を単位として分析がなされてきたが、これを地域に拡大し、さらに東北日本と中央日本という二つの地域を比較することによりダイナミックな研究をおこなう

ことができる。本研究では、１か村少なくても６０年以上という長期にわたる史料を用い、しかも、１地域２か村以上の史料が残存する、地域単位の研究をおこなうことを目指す。つまり、世帯研究にとって最も重要な世帯構造のサイクルの分析を地域単位でおこなうことが可能になる。そのためにも、データベースの作成は必要不可欠であり、将来の世帯研究に対しても大きな貢献になることと確信している。

第３は、本研究が、家族社会学と歴史人口学の学際的研究であるという点である。特に本研究では既存の家研究を整理し、歴史人口学の世帯構造研究とのリンクを模索する。

３．研究の方法

主に以下の４つの柱を立て研究を行った。

（１）既存研究の整理：家族社会学ならびに歴史人口学の既存の研究、さらに両地域の地方史研究を整理し、世帯構成・分家創設・絶家・絶家再興・階層に関する世帯情報に関する分析指標と継承・位座・同居親族に関する個人情報、さらに、個人の出生・結婚・死亡に関する人口指標の確認作業をおこなう。

（２）史料の検討：各史料を文献資料とつき合わせながら、その特徴を明らかにし、利用可能な情報の整理をおこなう。

（３）データベースの構築：これまでに申請者が作成したデータベース作成マニュアルを用いて、データベース構築・データクリーニングをおこなう。２地域の比較分析を考慮して、指標と変数を作成し、地域別分析のためのフラットファイルも作成する。

（４）分析： 世帯については、①世帯数・世帯規模等の基本指標を明らかにする。②ハメル・ラスレット分類を修正したモデルを用い、世帯構成の特徴を見出す。③修正モデルを用い、世帯構成の２項間移行を観察する。個人に関しては、①基本的人口指標の作成、②続柄の検討をおこなう。

（データベース未完成時は、村単位の分析に留める。）

４．研究成果

本研究は、世帯構造分析用のデータベースを構築し、徳川後期農民社会の世帯構造の特徴を解明することが目的であった。本研究期間は、データベースを構築する上で、検討すべき複数の問題にぶつかり、課題をクリアするのに時間を費やした。具体的には、史料である宗門改帳の記載方法（特に続柄に関して）が村によって異なり、全てに共通する指標をどのように作成するか再検討を余儀なくされ、データベースの構築作業というステップにとどまった。データベース完成にはまだいくつかのステップを踏む必要があることも明らかになった。

本研究は、データの確認作業、およびデータベースの構築に予想以上の時間がかかってしまい、当初の目的を果たすには至らなかったが、着々とデータベースは完成しつつある。データベース構築の進捗状況は以下のとおりである。

【データベース完成】

東北日本７か村　データクリーニング続行

中央日本２か村　データクリーニング続行

【データベース一部変更・データクリーニング中】

中央日本２か村

【データ入力中】

中央日本１か村

【史料確認作業中】

中央日本１か村

データベースは未完成であるが、一部完成している会津山間部4か村のデータを用いて、人口および世帯構造の基本的な指標について分析、単行本の一部として発表し

た。その結果は以下のとおりである。

会津山間部の初婚年齢は中央日本に比べると低いが、東北日本の中では低いとはいえないこと、初婚に関する年齢規範の存在、皆婚であるが離婚・再婚が多いことが観察された。また、婚姻を世帯単位で分析すると、高い階層と低い階層の間では婚姻関係が結ばれにくいことが明らかになった。家督の継承に関する分析からは、家督の継承時には世帯構造は変化しにくいことが明らかになった。家督の継承は、子ども世代の結婚時におこなわれるのではなく、親世代と既婚の子どもが同居し、その後家督の継承がおこなわれる。また、世帯構造については、単独世帯に焦点を当て分析をおこなった。その結果、ハメル・ラスレットモデルの６類型のなかでも非家族世帯についでその割合が低い単独世帯（ひとり暮らし）は、若い年齢層には存在せず、高齢者層で占められていること、生涯未婚者は極端に少ないことが明らかになった。これらの研究はパイロットスタディーとして位置づけ、今後の研究の基盤にしたいと考えている。

また、研究期間中に新たに本研究のデータベースに加えることが可能な史料の存在を確認、検討する機会を得た。信州山間部２か村のフィールドワークをおこない、史料の確認作業と史料の一部を撮影することができた。今後、この２か村もデータベースに加え、中央日本の地域を２地域に拡大することにより、よりダイナミックな近世農民社会の世帯構造研究が可能になるものと確信している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　　件）

〔学会発表〕（計　　件）

〔図書〕（計　５件）

① 岡田あおい他、境界を生きるシングルたち、人文書院、2014、145－162 ページ.
② 岡田あおい他、生をつなぐ家　親族研究の新たな地平、風響社、2013、113－132 ページ.
③ 岡田あおい他、歴史人口からみた結婚・離婚・再婚、麗澤大学出版会、2012、80-100 ページ.
④ 岡田あおい他、「絆」を考える、慶應義塾大学出版会、2012、28-46 ページ.
⑤ 岡田あおい他、現代人の社会学・入門、有斐閣、2010、55-70 ページ.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者

岡田　あおい（OKADA, Aoi）
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：５０２４６００５

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：